物語をめぐる物語、としての小説 11

第1部 記憶・他者・身体
——『ノルウェイの森』と自己物語の困難 21

序 章 自己物語の氾濫／困難 22

第1章 想起（の物語）の失敗 31

1 記憶のための物語／証言のための物語 31
2 共有された死者の記憶 35
3 物語の座礁と語りの再編成 37
4 第一の企図の放棄 42
5 物語の破綻と残された問い 49

第2章 身体／他者
——自己物語とそのさまざまな困難 51
1 自己物語の困難 51
2 他者とともにあることの困難——「永沢」と「ハツミ」 55
3 身体を生きることの困難——「レイコ」 60
4 重要な共演者の死 66

第3章 「直子」
——沈黙する身体 76
1 病いの語り 76
2 行き違う物語 79
3 「再入場への恐れ」と「待望者」の誤謬 86
4 神話化する身体／夢想化する記憶 93
5 証言の失敗 100

第4章 「縁」
——語り続ける身体 102
1 語り手としての「縁」 102
2 物語を受け取ることの困難 103
3 作り話、あるいは嘘つきの戦略 113
4 境界画定のゲーム 120
5 コンティンジェント・セルフ 124

終 章 忘却の忘却としての物語 128
1 生存の論理／死者の物語 128
2 忘却としての語り直し 131
3 ループする語り 133
4 浮上し続けるものとの闘い 136

第2部　災厄の痕跡
——日常性をめぐる問いとしての『ねじまき鳥クロニクル』　139

序　章　日常性への問い　140

第1章　他者の同一性＝正体をめぐる物語　149

1　他者の徴候——「泥棒かささぎ編」　150
2　横滑りする問い——「予言する鳥編」　158
3　他者に物語（名）を与える物語——「鳥刺し男編」　178
4　他者性の寓意としての「電話の女」　181
5　他者の行方　187

第2章　偶発的身体　193

1　身体が呼び起こす物語　194
2　身体とその二つの状態　208
3　身体をめぐる権力とその二つの顔　225
4　変身　238
5　闘争の二つの文法　244
6　身体・権力・日常性　249

第3章　飽和する記憶　254

1　戦後の物語／戦時の記憶　254
2　挿入される戦場の記憶　259
3　戦時の記憶とその両義性　264
4　無の贈与／記憶の贈与　267
5　開かれた物語／飽和する記憶　271

6 時を損なう者／時を繕う者 276
7 可能なる起源 289
8 〈起源〉への降下 304
9 記憶／時間／生命 312
10 災厄の記憶と再生への賭け 319

終章 恐怖の持続 331

そして、物語は続く 337

あとがき 343